



地域と響き合う 農学教育の新展開

農学系現代GPの取り組みから

中島紀一編

地域と響き合う農学教育の新展開
—農学系現代GPの取り組みから—

定価はカバーに表示してあります。

2008年3月1日

第1版第1刷発行

編者 中島紀一

発行者 鶴見治彦

発行所 筑波書房

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館内

電話03-3267-8599 振替00150-3-39715

www.tsukuba-shobo.co.jp

印刷/製本 平河工業社

© Kiichi Nakajima 2008 Printed in Japan

ISBN978-4-8119-0323-1 C3037

筑波書房

序文

「通貨よりも重要なのは、農業です。農業は文化ですから。」

かつてEUの委員長であったドロールの言葉である。

文化はカルチャー、耕すという意味のカルチベートからくる。土地の耕し方は、その国、その地方の地質地形、植生など気候風土、土壌、水、日照、気温など諸要因により違う。水田稲作のアジアモンスーン農業と牧畜酪農のヨーロッパ農業が、農村のあり方から農家のつくり方、信仰、生活習慣にまで大きな影響を与えていることは、和辻哲郎の『風土』を持ち出さなくても誰もが知っている。

その国、その地域に住み続けてきた人々のアイデンティティは、正にこの「文化」にある。だからドロールは、人が生きるときの拠りどころである「文化」は、「経済」以上に重要だと言ったのである。

これを日本の国内に限っても同じことがいえる。東京もしくは、大都市に集中してグローバリズムと国際間競争を余儀なくされ日本中が画一化して、地方の魅力が埋没しかかっている。農村崩壊の危機。それが日本の現在である。

産業革命以後の近代世界の潮流は、“工業化”と“都市化”であった。

こうして20世紀世界は「農村の都市化」をおしすすめた。いわばこれが“20世紀型文明”であった。文明、シビリゼーションとは、野蛮からの脱出を意味する。アメリカがリードした20世紀世界は、工業化、都市化、人工化を急速におしすすめた。こうしてこの100年間に、地球上の人口は4倍に増えただけだが、その人口と文明を支えるための経済は20倍、エネルギー消費は25倍にも拡大した。その原因は、“工”の発想にある。工学の発想は、部分効率追求型で、結果的に公害や外部不経済をもたらすばかりか地球社会を深刻な不安に陥れてしまった。地球温暖化をはじめとする数多くの地球環境問題や深刻な都市問題である。

大量生産、大量消費を推進した工業文明は、便利で効率的なライフスタイルで世界を覆った。それは生活水準の底辺を押し上げたものの一方で、高密度で人工的な大都市、景観の画一化、各地の文化の滅失、犯罪、暴力、異常セックスなど大都市型の社会病理現象をもたらしたのである。

利便性と経済効率第一の社会システムが完成されていく。地球と国土の自然環境の悪化がすすみ、市民生活は自然と縁遠いものになる。特に、子どもの成長発達、情緒性の涵養にかかわる自然体験の減退も著しい。

元来、自然の、太陽エネルギーによる光合成反応を基盤とする植物生産、またその植物生産量に制約される動物生産である“農業”は、本質的に工場生産である“工業”の生産性を越えることは無理である。

しかしながら、これまで述べてきた地球環境問題の解決や都市病理の治癒のためには、そして未来を担う子どもたちの健全育成のためには、「農林の多面的機能」を100パーセント発揮し活用することが求められている。

冒頭に紹介したように、文明に行きすぎた20世紀社会の問題点、人々のアイデンティティをとり戻す意味でも、21世紀社会は経済のみならず「農」の回復を図らなければならない。ヨーロッパ諸国の20世紀後半の政策をみると、農業政策に環境政策を重ねあわせて“環境保全型農業”を推進し、“グリーンツーリズム”（都市民の農業体験、農村滞在、農村文化の保存）や、子どもたちには“教育ファーム”での体験機会が提供されるなど、大きくエコロジーにシフトしている。生産性の差は、都市のお金が農村に廻される形（デカップリング）でうめられる。

都市民は、「農」を保全するカネとヒトを応援する形で、国土環境の保全と自然と歴史と文化と人間性の回復を得ているわけである。

エコロジカルシティへと都市そのものを転換しようという潮流とあわせて、「21世紀は都市の農村化」が不可欠なのではないか。私は既に『農の時代』（学芸出版社、2003年）を発表しているが、“地球の将来は「農」が担う”と本気で考えている。

さて、これまで日本の社会は、これは経済界のみならず大学界においても、一方的に“工業化”、“グローバル化”をすすめてきた。そのなかで、「農」も“工業化”し、農村地域も“都市化”を“最善”と信じてきた。

しかし、すべて正しかったかどうか疑問がでてきた。これからは、これを検証し、誤りを正し、「農」の本質、日本における「農」、日本各地の地域性を踏まえた「農」の特質を、改めて研究し、その上で21世紀日本の「農」の再構築をめざさなければならない。

日本の農学系大学は、歴史的に地域社会と深く関わって発展してきた。本来、大学はこうした“地域社会のニーズ”に応えるべき存在である。

本書が、日本の21世紀を担う若人たちの社会への目覚め、「農」への愛、力強い行動力の存在をあますことなく伝えていることに、大きな期待と希望を得た。

皆様のご活躍に拍手、そして末永い継続を願う。

進士五十八（しんじいそや／東京農業大学前学長）

目次

序文	進士五十八	iii
序章 地域と響き合う大学へ		
—農学教育の現代的ミッション—		1
第1章 農村再生プロデュース		
—地域に寄り添う農学教育プログラム— (秋田県立大学短期大学部)		13
第1節 「農村再生プロデュース」という教育プログラムの特徴		13
1. はじめに		13
2. 本教育プログラムの目的と内容		14
3. 地域住民と学生の連携体制		16
第2節 学生と住民が連携する付加価値づけのお米づくり		23
1. お米づくり活動の狙い		23
2. お米づくり活動の展開状況		25
3. 特色のある「あきたこまち」を栽培する		27
4. 特色のある「あきたこまち」を売る		31
5. お米づくり活動からみえてくる意味		38
第3節 農村への花きの導入・普及活動を通した新しい農学教育の実践		41
1. はじめに		41
2. ベツレヘムの星をとりあげるに至った背景		42
3. 1シーズンめの活動内容		45
4. 2シーズンめ以降の活動内容		51
5. 本活動の可能性		55
第4節 「ダチョウ」の地域導入からみた実践教育の展開		58
1. はじめに		58
2. 畜産資源としてのダチョウの可能性		59
3. 農村における導入の実践		63
4. ダチョウ飼育の発展的可能性と課題		72

5. 農村へのダチョウ導入が生んだ教育上の効果と課題……74	
第5節 現代社会に果たす役割……76	
第2章 ぎふ公民館大学	
—地域風土に対応した教育プログラム— (岐阜大学) ……81	
第1節 「風土保全教育プログラム—ぎふ公民館大学—」の取り組み ……84	
1. 現代的教育ニーズと風土保全教育プログラム……84	
2. 風土保全教育プログラムの背景……85	
3. ぎふ公民館大学の7つの教育拠点と教育プログラム……89	
4. ぎふ公民館大学の7つの教育拠点……91	
第2節 飛騨市公民館大学の活動 ……97	
1. 飛騨市公民館大学の舞台……97	
2. 2年間の活動の流れ……100	
第3節 地域住民の学び (生涯学習) を媒介とした地域・まちづくり	
—「飛騨市公民館大学」の取り組みをとおして— ……104	
1. 地域・まちの衰退と風土の保全……104	
2. 地域・まちづくりとは何か……105	
3. 「飛騨市公民館大学」の取り組み……106	
4. 地域住民の学び (生涯学習) をとおした地域・まちづくり……110	
第4節 学生が取り持つ地域住民と都市住民の交流	
—岐阜大生が飛騨市の中山間地域で行った奮闘記— ……116	
1. 数河学校の実践をまえにして……116	
2. 「数河学校」の実像を作るまでの模索……117	
3. まずは現地を訪問……119	
4. 現地体験とアンケート調査からみえたもの……119	
5. イベント企画立案までの生みの苦しみ……122	
6. 各チームの準備と数河フェスティバル……125	
7. 永続的な数河学校開催への課題……127	
第5節 風土保全教育プログラムの成果と展望 ……130	
第3章 地域連携によるマイスター育成講座	
—新しい課題対応型体験学習プログラム— (筑波大学) ……137	
第1節 はじめに……137	

第2節 食と緑のマイスター育成講座と食と緑のインターンシップ……140	
1. 1年目の難関……140	
2. 食と緑のマイスター育成講座シラバス……147	
3. 食と緑のインターンシップシラバス……150	
4. 学生教育効果に関する評価方法……151	
5. 平成18年度「食と緑のマイスター育成講座/インターンシップ」の改良……167	
第3節 「食」に関わるマイスター育成講座と学生の意識 ……177	
1. 「雑穀を用いた食育」コース……177	
2. 「自家製チーズを楽しむ」コース……180	
3. 「フューチャー・ダイニング～安全・安心な食卓づくり～」コース……182	
第4節 「環境」に関わるマイスター育成講座と学生の意識 ……186	
1. 「自然観察指導の基本と自然環境の保全」コース……186	
2. 「森林の自然とそのはたらき」コース……188	
3. 「ガーデニングマイスタープログラム」コース……189	
第5節 おわりに……196	
第4章 市民が支える遊休農地の保全	
—自然共生型地域づくり教育プログラム— (茨城大学) ……201	
第1節 耕作放棄地の広がり市民参加の保全・再生活動 ……201	
1. 急増する耕作放棄地……201	
2. 耕作放棄と農地の自然回帰……203	
3. 「可能性としての耕作放棄地」という視点……205	
4. なかなか自然回帰できない耕作放棄地の現状……206	
5. 自然回帰への方策……207	
6. 「耕す市民」への期待……207	
7. 茨城大学現代GPが目指すもの……208	
第2節 耕す市民農耕集団「のらっくす」の成立背景と歴史の変遷 ……212	
1. 営農……214	
2. 日本の農業並びに食の安全を考える交流の場として……215	
3. 教育・研究を通じた地域住民と学生の交流……216	
第3節 学生ボランティアによる栽培初心者への支援 ……222	
1. ゼロからはじめよう家庭菜園……222	
2. 学生が家庭菜園インストラクターに? ……223	

3. 市民と学生がともに学ぶ大学農場へ！ ……	225
第4節 耕作放棄谷津田の再生に取り組む学生たち ……	230
1. うら谷津再生プロジェクトの概要 ……	230
2. うら谷津再生の進展と得られた新知見 ……	232
3. うら谷津再生活動の地域での広がり ……	235
4. うら谷津GPの取り組み過程 ……	236
5. GP受講生のレポートから ……	237
第5節 「あみ自然再生ネットワーク」結成への経緯とこの二年 ……	246
1. 〈あみ自然再生ネットワーク〉結成の背景と経緯 ……	246
2. 〈阿見町の農業と自然を考える・地域づくり勉強会〉の活動 ……	247
3. 〈あみ自然再生ネットワーク〉の結成と「あみ・大好き青空市」の開催 ……	249
第6節 農学教育の視点からみた意義 ……	256
1. 21世紀は総合化の時代 ……	256
2. 地域の問題から農学を考える ……	258
3. 地域・人との交流が学生の可能性を開く ……	261
座談会 現代GP（地域貢献型）が農学教育に問いかけるもの ……	265
あとがき ……	307

本書で取り上げられる現代GPの名称

平成16年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム
〈地域活性化への貢献〉

◎秋田県立大学短期大学部

農村地域の活性化実践プロジェクト（農村再生プロデュース）

◎岐阜大学

地域協学型風土保全教育プログラム ーぎふ公民館大学ー

平成17年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム
〈地域活性化への貢献（地域密着型）〉

◎筑波大学

新しい課題対応型体験学習プログラムの開発

ー地域連携によるマイスター育成講座への運営参加を通してー

◎茨城大学

自然共生型地域づくりの教育プログラム

ー都市周辺の荒廃農林地再生に向けた農学教育の新展開ー